

「ストーリーの社会学」の可能性

—個人的な経験のナラティブからの出発—

小林 多寿子

KOBAYASHI Tazuko

1. K・プラマー「テリング・セクシャル・ストーリーズ」1995年—

イギリスの社会学者K・プラマーは、1983年の『ドキュメンツ・オブ・ライフ』[邦訳『生活記録の社会学』1991年]¹の著者として知られ、1980年代にひろがったライフヒストリー法再評価という潮流のなかでも早い時期からライフヒストリーを論じた社会学者である。そのプラマーが1995年にあらわした『テリング・セクシャル・ストーリーズ』²は、「ストーリーの社会学」という新しい立場をうちだして、たいへん興味深い本となっている。この本は、おもにカミングアウト・ストーリー、レイプストーリー、性的な被害からの回復のストーリーというセクシャル・ストーリーを具体的にとりあげ、これらのストーリーの検討をもとに、現代のセクシャリティについて再考をめざすものである。そして本書は、かつてライフヒストリー論を展開したプラマーが新たに「ストーリーの社会学」の構築をめざしたいという意欲あふれる試みでもある。だから、現代のセクシャリティの問題もさることながら、「ストーリーの社会学」を提起したとくに注目したい。そのポイントとして、つぎのような三点をとりあえず指摘できる。

一つには、「ストーリーの社会学」という新しい視角が、プラマー自身の個人的な二つの経験から立ち上がってきたものであることにある。プラマーは、理論的にはシンボリック相互作用論の立場というスタンスを一貫してとり続けながら、1970年代よりイ

ンタビューを中心としたフィールドワークをおこなってきた。だが、1978年にとりくんだ「性的な多様性」調査でうまく進まなくなった経緯があり、そのことが17年ものちの「ストーリーの社会学」の着想の下敷きになっている。それに加え、プラマー自身のカミングアウト・ストーリーが短いながらも綴られているが、そのストーリーには、本書のテーマである「セクシャリティの社会学」と「ストーリーの社会学」という二つのテーマが重なっており、ひじょうに興味深い。二つには、「ストーリーの社会学」の応用可能性がかなり高いのではないかと予想されることである。彼自身、「ストーリーの社会学」の観点からセクシャリティをとりあげるのとは一つのテーマにすぎないと述べている。三つには、「ストーリーの社会学」という魅力的な視角は、1980年代のライフヒストリー論のなにを受け継ぎ、なにを新たに視角としてとり入れたのかという、いわば学説的な展開への関心がひきおこされることである。

本稿では、プラマーの二つの個人的な経験のナラティブを手がかりとして、かれの提起する「ストーリーの社会学」はどのようなものであるのかをラフなかたちで描いてみたい。ほんとうは、本書のおもしろさは、「ストーリーの社会学」という糸で貫かれながら、縦横にちりばめられたたくさんのセクシャル・ストーリーそのものにこそあるとおもう。読者は、ともすると、個々のストーリーのおもしろさに引きづられそうになるが、けっしてそのストーリーの位置を見失ってしまうことはない。「ストーリーの社会学」の枠組みに支えられ、それぞれのスト

ーリーは活かされている。その枠組み自体がかれの個人的なストーリーから引き出されたものなのである。

2. プラマーの「個人的な経験のナラティブ」

プラマーの「個人的な経験のナラティブpersonal experience narrative」のひとつは、1978年におこなった性的多様性のインタビュー調査での経験を語ったものである。プラマーは、SSRC（社会科学調査カウンシル）の助成により、「性的に変わった経験をもちつづけてきた男女」の調査を手がけはじめた。その調査は、たとえば「小児性愛者」「異性装者」「サドマゾヒスト」などのライフヒストリーを社会学的に分析するプロジェクトであった。ところが調査は、当初、うまくいっていたが、しだいに困難になり、進まなくなった。結局、そのときインタビューをおこなってえたデータの大半は、論文に使われることもなく、ファイル・キャビネットに眠ったままになっており、わずか一部がこの本にすこし引用されているだけなのである。

なぜその調査がいきづまったのか？インタビューし、テープ起こしまでしたのに、なぜ手つかずのままなのか？プラマーは、当時のプロセスを再考しながら、疑問がふつふつとわき出て、しだいに調査を続けられなくなったのは、社会学者としての自己覚醒self-awarenessにあったのだという一つの答えをだしている。つまり、無反省で無批判のままに、調査で集められたセクシャル・ストーリーが「単純に想定された現実の直接のコピーと理解することはできない」という認識にめざめたということである。「調査は、倫理、エスノセントリズム、解釈、政治の諸問題にとりかこまれている」という理解にいたったからである。それは、社会学者自身が、調査のプロセスの一部であり、社会的なものであるという自覚、つまり社会学者自身が、観察され、分析され、そして書かれる対象となる調査プロセスに組

み込まれた一部なのであるという認識をさしている。

だが、プラマーは「この苦境は私だけのことではなかった」という。再考するなら、そのような疑問をいただき、自己覚醒にいたったこと自体、プラマーもまた時代の流れを体現していたことに気づいた。1980年代の人類学者たちが自覚しはじめたフィールドワークとエスノグラフィーの政治性の問題に、彼自身も直面したのであった。

いまひとつの個人的な経験の話は、プラマーのカミングアウト・ストーリーの断片である。プラマーは、プロローグで、つぎのような短い自伝的な話を載せている。

1960年代のなかごろ、プラマーが青年期にさしかかったとき、かれは苦悩をかかえていた。ある晩、その苦悩に耐えられなくなった。自宅の居間で両親はテレビを見、彼はドナルド・ウエストの『同性愛』という本を読んでいた。突然、「それはぼくのことだ」と叫び、わあーっと泣き出してしまった。両親は困惑して狼狽した。当時の親たちにとっては、それは「悪いこと」であっただけでなく、彼らの理解をこえていた。精神科医にみてもらうことになった。脳波の検査をし、異常がないことがわかると、医者は、ゲイであることを受け入れることができるかと尋ねた。できると答えると、その医者は、それなら気にすることは無いといった。

ここで、プラマー自身が「わたしはゲイである」ことをカミングアウトしている。

このストーリーは、きわめてプライベートで個人的なものである。だが、個人的なナラティブであるからこそ、ストーリーとはなにかを考える議論のきっかけとしても、またセクシャル・ストーリーを論じる発端としてもここで語ることは適しているとプラマーは考える。

つまり、なぜあのとき、両親に話そうとしたのか、なぜここでこのストーリーを持ち出すことにしたのか、ストーリーを語ることで、語る人と聞いた人、

そして社会にどのような役割をはたしたのか、そしてストーリーを語らなかつたら、どうなっていたらろうか。このように問いかけるとき、すでにプラマーは「ストーリーの社会学」の問題意識を表明している。

この二つの個人的な経験は、プラマーが「ストーリーの社会学」を提起する出発点になっている。1978年の「性的多様性」のインタビュー調査の話からは、聞き手となった調査者として、ストーリーの生まれる現場に幾度となく身をおくなかで、ストーリーを反省的に再考する契機になった。プラマー自身のカミングアウト・ストーリーからは、ストーリーの語り手自身として、ストーリーを語る動機や戦略、その政治性をとらえることができたのである。

3. 共同行為としてのストーリー

1978年のインタビュー調査がたちいかなかった経験は、ストーリーのはらんでいる問題性を気づかせ、ストーリーを共同行為 *joint action* として考える視点を導いた。プラマーは、多くのセクシャル・ストーリーを聞きながら、ストーリーを聞いて、どうするのかと自問するうち、「私の関心は、人びとが語ることにあるのではなく、語りに含まれている複雑な社会過程にある」ことを理解した。そして社会学者自身が、調査プロセスに組み込まれたものであるという自覚もまた、ストーリーが生まれる相互作用の場を社会的行為としてとらえなおすことにつながった。

ストーリーを語ることは、社会的行為の流れのなかにある。つまり私たちは、シンボルと言語をとおして、自己と他者をたえず考えており、ストーリーを語り、意味を表出することは、すなわち自分と周囲の世界にたえず意味をあたえ、社会的世界を制作していることである。その実践のなかに私たちがいることをふまえるなら、ストーリーを語ることはすなわちシンボリックな相互作用の核心に位置づけら

れる。だから、ストーリーは共同行為として考えることができる。

共同行為としてストーリーをみると、ストーリーは、「語り手、誘導者 *coaxer*、テキスト、読者、ストーリーが語られるコンテクスト、これらのあいだで循環するたえざる流れに依存している」ことになる。

まずストーリーを生みだす語り手がいる。ストーリーの語り手は、ストーリーの生産者である。インタビューの場面での語り手だけでなく、自伝や日記、手紙の書き手もまたストーリーの生産者であり、自分たちのストーリーを産出する。

ついで、プラマーは1970年代におこなった調査を思い返して、社会学者としての自分の役割は、誘導者であったという。つまりこれまで語ったことのないストーリーを語らせるところまで人びとを誘い出し、一定の方法で語るように導いた。だからストーリーの生まれる場面には第二の生産者 *a second kind of producer* がいることを指摘している。第二の生産者は、語り手に緊密に結びついて、人びとからストーリーを引き出す力をもつものである。インタビューし、問いただしたり、質問票を送るものもあれば、手を握り、ただ微笑むだけで、聞いているものもある。ライフヒストリーを聞く社会学者だけでなく、カウンセリングをおこなうセラピストや口述史を聞き取る口述史家、あるいは法廷の尋問者やタブロイド紙の記者もまた、人びとにストーリーを語るように誘導し、指導し、ときに強制し、そしてストーリーを生みだすことにかかわるという点で、第二の生産者である。第二の生産者は、語られるストーリーの性質を変えるほどの重大な役割をはたすことになるという。

さらにストーリーには、ストーリーの消費者がいる。それは読者、聴衆、あるいは視聴者といいかえることができる。ストーリーを消費することは、ストーリーを解釈し、意味あるものにするのである。ストーリーの読者がそのストーリーをいかに解釈するかということは、ストーリー理解の重要な過程で

ある。読者は、ときに無礼な、ときに情熱的な理解者になる。

これらの生産者と第二の生産者、そして消費者との相互作用のなかで、ある意味をもった対象、つまりストーリーという産物が出現する。ストーリーという産物は、ストーリーの語り手という生産者とストーリーを導き出す第二の生産者によって構成された人生の瞬間が凍結されたものであり、読者という消費者の手にゆだねられるときを待つものである。

4. ストーリーとコミュニティ

プラマーのいう「共同行為としてのストーリー」の要点は、ストーリーをコンテクスト性からとらえる視点にあるだろう。ストーリーは、さまざまなコンテクストでいろいろに語られ、読まれるものであり、ストーリーの意味は、語り手というストーリーの生産者と読者という消費者との相互作用の流れから立ち上がるものである。安定した意味を獲得しているストーリーもある。だが、多くのストーリーは、いつでもどのようなコンテクストに結びつけられるかによって変化し、揺れている。あるストーリーが生まれるには、そこになんらかの社会的コンテクストが存在する。どのような社会的コンテクストがあってストーリーがでてきたのかを問いかけることは「ストーリーの社会学」の根幹のテーマなのである。

また、ストーリーは、だれに読まれるのかによって異なったコンテクストで解釈されるものである。あるストーリーは、社会的世界と解釈的コミュニティを軸にして読まれ、消費される。そこにはストーリーの独特の聞かれ方があり、自分たちで「記憶」を共有するようになる。ストーリーは、コミュニティがちがえば、異なった反応を呼び起こすものになる。

プラマーは、たとえばHIV感染者のストーリーの事例をあげている。HIV感染者のストーリーは、あるコミュニティにはいると、そこでは支援と愛と治

療を提供されたが、ほかでは排除とスティグマと恐怖という枠組みで解釈されたという。あるいはバスケットボール選手のマジック・ジョンソンが1991年にHIV感染を表明したとき、そのストーリーは、マジック・ジョンソンをヒーローとしていた若者のコミュニティでは、かつてエイズストーリーには敵意をあらわしていたのに、涙と困惑をもって受け入れられた。だが、ほかの大人のコミュニティではそのストーリーにおなじように耳をかたむけられたかどうかはわからない。

だから、語られるコンテクスト、そして読まれるコンテクストの双方に注意をむけて、ストーリーは考えられなければならない。そしてプラマーによれば、ストーリーは、抽象的に漂流しているのではなく、年齢、階級、ジェンダー、性的志向にしたがって構造化された、歴史的に発展する「記憶の共同体」に根ざしているという。つまり、ストーリーは、ある特定のコミュニティから生まれるものであり、また「ある階級、人種、ジェンダー、経験、趣味のような想像の共同体あるいは社会的世界のなかで読まれる」ものである。

ストーリーは決して孤立したものではない。ストーリーは語られ、読まれ、それをとおしてコミュニティが生まれる。ストーリーが生産されることとコミュニティの構築は不可分の関係にあるといえるのかもしれない。ストーリーが語られるには、聞いてもらうコミュニティがなければならず、聞いてもらうコミュニティにとっては、その歴史やアイデンティティや政治をいっしょにつくりあげるストーリーがなければならない。ストーリーはコミュニティを、コミュニティはストーリーをたがいに必要としている。

5. ストーリーの政治性

ストーリーの社会的コンテクスト性に注目するならば、ストーリーがきわめて政治的なものであること

に気づくであろう。ストーリーは、それほどかんたんに語られるものではない。ストーリーが語られること、そして聞かれることは、いつも政治的な過程のなかにある。

プラマーがストーリーの政治性を鋭く論じることができるのは、かれの個人的な経験のナラティブが自己のカミングアウト・ストーリーであったからである。「カミングアウト」という言葉には、もともとクロゼットにしまっておいたものをひっぱり出すという語義があるという。「同性愛者である」ことは、語る場も、また聞かれる場もなく、公けの眼から秘密にされて、それこそクロゼットにしまわれたままの時代がながく続いた。

「20世紀初めの西欧世界では、ゲイあるいはレズビアンであると語れば、あらゆるかたちでの劇的な社会的排除を招くことになった。たとえば、収容所への監禁、犯罪者としての処罰と投獄、医療化、つまりあらゆる治療とセラピーがあり、宗教的な追放、共同体からの排斥とあざけりがあった。「他者」に語らないだけでなく、自己にさえも語れないことがすくなくなかった。」(Plummer 1995: 27)

ところが1969年、ニューヨークのストーンウォール事件をきっかけにして「ゲイ解放運動」がはじまる。この事件は、カミングアウト・ストーリーにとっても転機となった。「カミングアウト」という言葉自体、1960年代の終わりから70年代初頭には耳慣れたものになったという。70年代から80年代には、数多くのカミングアウト・ストーリーがまさに噴出し、自分の経験はこれほどふつうの経験であったのかとおもえるくらいにありふれたものになってきた。このようなカミングアウト・ストーリーのドラマティックな変化のなかにあったプラマーには、当然のことながら、よりいっそう敏感にストーリーを語ることの動機や戦略、その政治性を論じることができる。

いいかえると、ストーリーは、さまざまな意味で権力と結びついたものである。ストーリーを語った

り、聞いたりする、ストーリーの生産と消費は、リテラシーや知識、金銭、時間、空間という文化的、経済的な資源を必要とする。そのような資源をもち、社会的ヒエラルヒーのトップを占める人の声はたっぷり聞かれるであろうし、ヒエラルヒーの底辺にいる人の声はなかなか聞こえてこないことは、容易に想像のつくことである。だが、たとえそのような資源を個人がもっていても、ストーリーが声になる空間を創造したり、閉鎖したりするのが、社会的権力である。

いまなお、どこでもカミングアウト・ストーリーが語れるわけではない。語れるかどうかは、経済、宗教、仕事、家庭、メディア、政府といった相互作用の場によって変わるものである。語ってもいいかわからないときもあれば、「沈黙は金である」というときもある。ゲイであるというストーリーを語ることで、ある可能性を開くこともあるが、他の可能性を閉じることもあるのだ。

プラマーのカミングアウト・ストーリーもまた、語る空間を選びながら、じょじょに語られていった。

プラマーのある晩の叫びは、青年期にいたるまでの苦悩と自己対話のすえに表出されたものであろう。早い時期からまわりとうまくいかないという強い違和感を感じるかたちで、苦悩はあらわれていたとおもう。ゲイであることの懸念や自己発見を経て、まず自分がなにであるかを自己自身に語っていたはずである。そして両親のいる前で叫びのかたちで、はじめて他者にカミングアウトした。そして医者にも話した。医者問いに答えたときに、「ゲイ」であることを受け入れ、そのアイデンティティを自分のものとする第一歩となった。

だが、このときのカミングアウトは、両親と医者という「限定された範囲の特定の他者」だけに語られている。プラマーはそれ以上言及していないが、もっと公的なカミングアウトをのちに、おそらく1970年代になって、どこかのゲイ・コミュニティでおこなったであろう。そして、1990年代のこの本に

自己のカミングアウト・ストーリーを盛り込むことは、より広い世界にむけて自己のストーリーを語る空間をつくりだし、またセクシャル・ストーリーの社会学的考察というコンテキストに載せるためのいわば戦略的で「政治的カミングアウト」なのである。

結局、プラマーによれば、ストーリーを語ることは、けっしてなにか「真実」をあきらかにすることではなく、自分自身を「社会的に構成された伝記的なものsocially organized biographical objects」に変換することである。ストーリーがいかに組み立てられるかを考えると、まず、ストーリーを語る時、語りたい個人の動機やきっかけとなる状況がある。ストーリーは、筋書きや時間順序に沿うという「物語のルール」にしたがって、語られる。そしてストーリーは、語られる場と聞かれる場をもてるタイミングが得られたときに生まれるものである。そのタイミングは、カミングアウト・ストーリーが示しているような、歴史的な時間の問題でもある。

このように、ストーリーを構成する社会的次元は、個人的次元、状況的次元、組織的次元、文化的／歴史的次元という四つの次元で整理されている。いずれにしても自己のストーリーを語ることは、これらの次元をストーリーの構成にとりこんだきわめて戦略的なものであり、その点で、高度に政治性をおびたものである。プラマーは、あるストーリーが生みだされ、耳にすることが可能となる社会的政治的条件を問いかける、ストーリー・テリングの社会学を「ストーリーの社会学」のなかに構想できるといふ。

6. 「ストーリーの社会学」の可能性にむけて

プラマー自身が述べている。「本書のアイデアは、どのようなストーリー・テリングの過程にも応用できるはずである。セクシャリティに焦点をあてるのは、ほんの一例にしかすぎない。」

「ストーリーの社会学」は、セクシャル・ストーリーにかぎらず、多様なストーリーにあてはめて検

討することが可能であろう。わたし自身は、「ストーリーの社会学」の視点を、自分史の研究にとりいれることを試みている⁴。自分史は、自伝ともいいかえることができるが、自分で自分の人生を書きあらわす自己の物語である。プラマーは、方法論では、もともとライフヒストリー法から取り組みはじめており、一貫して個人が自己のことを語ることに関心をもってきている。だから、「ストーリーの社会学」の視点は、自己の物語としての自分史を考えるときにも説得力のあるものとなる。自分史がどのような社会的コンテキストのなかから生まれているのか。どのようなコミュニティで語られ、読まれているのか。そしてなぜ自分史を書くのかという動機もまた「ストーリーの社会学」の枠組みのなかで探求できる。プラマーの問いをそのままとりこむことが可能なのである。

とくに1980年代後半からの自分史ブームは、しまっておいた自分の人生を自分で書きあらわしはじめた、いわば人生のカミングアウト現象としてとらえられる。沈黙を破る人たちは、なにも同性愛者やHIV感染者だけではないのである。十分なりテラシーをもちながらも、自己の人生を語ることに躊躇していた人は多かった。しかし、戦争体験や高度経済成長という「激動の時代」を生き抜いてきたという実感のある人たち、そしてその人生の意味を探りたい人たちが、自分の人生を自分で書きあらわし、積極的に自費出版している。自分史を書く人たちのあいだには、「ストーリーの社会学」で論じられたような、人生のストーリーを書き、そして読むコミュニティが生まれているし、人生のストーリーを導きだす第二の生産者もあちらこちらでみいだされる。

自分史という自己の人生のストーリーの検討は、「ストーリーの社会学」の提起する視角のひとつの応用可能性を示してくれている。プラマーも一章で引用しているが、バーバラ・マイヤホフがいうように、人間は不変的に「ホモ・ナランズHomo narrans」、つまり語る人種であるのだから⁵、いつもなにかを語

り、ストーリーを生みだしている。その観点でいうなら、ありふれた日常の「個人的な経験のナラティブ」すべては、「ストーリーの社会学」の立場から論じることのできる可能性をもっているのである。

<註>

- 1 Plummer, K., 1983.
- 2 Plummer, K., 1995. 邦訳は、桜井厚・好井裕明・小林多寿子の共訳により、新曜社から近刊の予定である。なお、本稿のプラマーの引用部分ならびに訳語の大半はこの共訳によっている。
- 3 「コミュニティ」という言葉は、ストーリーとの関係でプラマーが好んでもちいている。プラマーによれば、とくに、近年、コミュニティはあたらしく刺激的な形態をとりつつあるのではないかという。もはやコミュニティは、安定した、堅固で、固定したものではなく、メディアに依存しながら、意味と歴史の感覚を共有する「記憶の共同体」のような新しいかたちの社会的世界として理解される。プラマーは、スタンレー・フィッシュのいう「解釈的コミュニティ」、ベラーらの「記憶の共同体」、B・アンダーソンの「想像の共同体」、メディア消費者研究からだされた「オーディエンスの共同体」などの用語も包含して、「コミュニティ」を考えているという。
- 4 小林多寿子 1995a. 小林多寿子 1995b.
小林多寿子 1996. 小林多寿子 1997.
- 5 Myerhoff, B., 1978, p.272.

<参考文献>

- 小林多寿子 1995a 「自分史と物語産業の誕生－1980年代の動向から－」『日本女子大学紀要 人間社会学部』5：89-108.
- 小林多寿子 1995b 「ライフヒストリー研究の視点からみた自分史」『現代のエスプリ特集・自分史』383:29-41.
- 小林多寿子 1996 「賞をめざした自分史－動機の語彙と「人生」の呈示－」『日本女子大学紀要 人間社会学部』6：23-38.
- 小林多寿子 1997 『物語られる「人生」－自分史を書くということ－』学陽書房。
- Maines, David R. 1993 'Narrative's moment and Sociology's Phenomena: Toward a Narrative Sociology', *Sociological Quarterly*, vol.34, no.1, pp.17-38.
- Myerhoff, Barbara 1978 *Number Our Days*, New York: Touchstone.
- Plummer, Ken 1983 *Documents of Life :An Introduction to the Problems and Literature of a Humanistic Method*, London: George Allen & Unwin. = 1991 原田勝弘・川合隆男・下田平裕身監訳『生活記録の社会学－方法としての生活史研究案内－』光生館。
- Plummer, Ken 1995 *Telling Sexual Stories : Power, Change and Social Worlds*, London : Routledge.